



# 気まぐれに短編



比良井 しほり

「今日は、初めてゆっくりと夜遅くまでいられるんだね」

彼女は恥ずかしそうに笑って僕を見上げた。

そうだね。と、僕は微笑んでからゆっくりと辺りを見渡す。

陽は落ちきって空には星が輝く夜更け。小学校か中学校かの校舎がすぐ近くに見える、小さな公園だ。僕らの他には人影はない。月明かりと、僕らの座るベンチの近くにある街灯だけが、僕らを細く照らし出していた。夏の終りを告げるようなひんやりとしやた風が抜けいていく。

「家にはなんて言ってきたんだい？」

僕が目を細めて笑って見せると、彼女は少し気まずそうに目を泳がせた。

「ユキの家に泊まるって」

それから、彼女は目を伏せる。

「嘘を吐いたのは、初めて？」

僕がからかうように言うと、彼女は戸惑ったように " そんなことないけど " と尻すぼみに答えた。

多分、嘘を吐いて外泊するのは初めて。今時の女子高生にしては珍しいかもしれない。真面目。それでいて小心。親に嘘をついたことが申し訳ないような気まずさもあるし、バレやしないかという不安感もある。

「初めて会ったのはここだったね」

僕はちょうど公園の真ん中辺りを見つめた。同じような場所を彼女も見つめているだろう。

今僕らが座るこのベンチで、僕はその日の計画や、あった出来事をぼんやり頭の片隅で考えながら読む気のあまりない文庫本をめくるのが日課になっていた。文庫本は誰だかの詩集で、僕の記憶が正しければ五年ほど前に買ったものだ。繰り返し読み流し過ぎて、一部は空で言えるかもしれない。

その日も興味のない人間の詩集をめくってその日の計画を練り終え、歩きだしたところだった。街灯のあまり届かない場所で、走って来た彼女にぶつかった。いくら計画の方に頭がいていたとはいえ、走ってきた人影に気づかなかったなんてと考えていた次の瞬間、僕は彼女の顔を見て一瞬で心を奪われた。かつて僕が初めて心を奪われた人間に、あまりに似ていた。

年齢の割に幼いとも思わせる純粹さ。変に真面目なところ。案外小心なところ。お人好し。似ているところはいくつも見つかった。

「あの日は走っていた理由まで僕に話してくれたね」

僕が笑うと、 " だって、だって " と彼女は僕を軽く叩いた。

塾で遅くまで友達と話し込んでしまって、あんまり遅いと怒られてしまうから。そんなようなことを言っていた。

「あんな時間にこの公園に人がいるだなんて思わなかったんだもの」

ほんの少し話したあと、その日は彼女とすぐに別れた。その後の計画を吹き飛ばしてしまうくらいの、彼女という存在。僕は入手した彼女の情報を元にあくまで偶然を装って彼女に接触をし

ていった。

純粋無垢な彼女は僕を疑うことを知らない。仕事が忙しくて、多くは夕方から夜しか会えない、社会人の僕。そんな設定を、彼女はすんなりと受け入れ、気がつけば"彼氏""彼女"という関係にまでなっていた。

昔の僕も似たようなことをしていた。けれど、昔の僕はもう少し接触するまでに時間がかかっていたっけ。

「アルマ」

ふと、彼女を重ねている焦がれる女の名前が口をついて出た。

「え？」

彼女が僕を見る。髪型は違えど、本当にアルマによく似ている。そもそもアルマはルーマニア人ぽくはなかったけれど。

「ハーフって羨ましいな。コウタさんかっこいいよね」

彼女に名前を呼ばれるたびに、僕はそう名乗ったのだったと思い出す。別に僕はハーフじゃないけどね。

「カッコイイから一緒にいるの？」

僕がイタズラっぽく笑って見せると、彼女は慌てて否定した。

「違うわ。どこかちょっと変わっているところよ。それに、とても優しいわ」

優しい？ この僕が？ 君を騙しているのにね。そうだね。アルマにも昔そんなことを言われたっけ。

「変わっているのかい？」

そりゃあ、人間から見たら僕は変わっているんだろうね。おかしくて僕は小さく笑った。

「からかわないで」

どこか恥ずかしそうな表情を浮かべながらも、真っ直ぐな瞳で僕を見てくる。その瞳がアルマにとっても良く似ている。

「僕は、マリカのそういう目が好きだよ」

「意味がわかんない」

そう言って彼女は僕を軽く叩いた。甘い香りが漂う。彼女の鼓動が高鳴るのを匂いで感じる。全身に駆け巡る、甘い香り。

僕は懐かしくアルマとのことを思い出した。アルマとは長い時間一緒に居られなかった。甘美な甘い誘いは僕の理性を奪っていく。真面目なアルマ。小心者のアルマ。家族を大切にしているアルマ。そんな彼女の全てを奪うのが恐くて、僕は彼女に会うことが出来なくなっていった。

僕は無言で彼女を抱き寄せた。小さく声を上げて、彼女は僕の腕の中に居る。

こんな事を、昔は出来なかった。甘い香りが恐ろしすぎて。

彼女が大きく鼓動をするたびに、甘い香りが放たれる。僕の頭がクラクラとし始めて、もう我を忘れてしまいそうだ。

誘惑が恐くて、アルマから離れた僕。あれから僕はどれだけの年月を後悔して過ごしただろう。国を離れて、長い間閉じこもって一一百年？ 二百一一もう、忘れてしまった。

甘い香りが濃度を増して、僕の鼻をくすぐる。

甘美な誘惑に、僕は身を委ねることを決めた。アルマに良く似た彼女に出会ったその瞬間に、僕はそう決めたのだ。もう、後悔をすることの無いように。

「私の事を、ちゃんと見てね」

僕の胸元から彼女の小さな声が聞こえた。

「コウタさんは私を見ているようで、どこか別のものを見ている気がする」

いつも彼女は直球だ。それも、アルマに似ている。そうだね。僕もよく判らない。マリカを見ているのか、アルマを見ているのか。けれど、僕にとってはそんな事はどうでもいいような気さえしてくる。

「聞いている？」

見上げようとした彼女の動作を、僕は少しばかり腕に力を入れて防いだ。目の前には彼女の白い首筋がある。

「コウタさん？」

クラクラする。もう、面倒なことなど考える余裕はない。

これから、彼女から全てを奪うことになる。彼女が大切にしている家族とは、もう二度と会うこともないのだろう。最後の挨拶をさせてあげようとかそんな計画を考えていた気もしたけど、今ではそんなことはどうでもよくなってしまった。

全てを奪う。小さな胸のざわつきと、更なる興奮が僕を襲う。背徳感とは、こんな感情を言うのだろうか。――悪くない。

彼女がまた何かを喋った気がしたけれど、僕には意味を理解する言語としては届いてこない。

僕はそっと彼女の首筋に顔を寄せ、ゆっくりと牙を突き立てた。

彼女が小さな悲鳴を上げてもがくのを、僕は両腕でしっかりと押さえつけた。彼女の柔らかな首筋に、僕の牙が突き刺さる感触。紅く甘い液体が滴る。

甘い。僕のあたまにじんわりと快樂が広がる。極上の血だ。

腕の中でもがいていた彼女は、やがてぐったりと大人しくなった。

首筋から溢れる甘く紅い液体を、僕は丹念に吸い上げる。

彼女が再び目を覚ました時――彼女は人間であった頃の記憶を殆ど失い、僕の配下となる。

親が騒ぎ出すのは明日なんだろう。別に僕は困らないけど、煩わしいから日本を出ようか？

さあ、アルマに似た君を連れて何処へ行こうか？ もう、君は年をとることはない。肉体は永遠に17才。悪くないだろう？

記憶と意志を殆ど無くした君は、目覚めた後に僕を責めることはないんだろう。それでも僕は君を必要とするのか、それとも落胆をするのか。恐ろしくてドキドキする。

でも、君が悪いんだよ。君があまりにアルマに似ていて、あまりに甘い香りを放つから――。

E n d